
世界の蹂躪者-仮面ライダーディバスター-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の蹂躪者―仮面ライダーディバスター―

【Nコード】

N6761K

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

世界を旅する破壊者『仮面ライダーディケイド』、世界を巡る怪盗『仮面ライダーディエンド』、そしてこの世にもう一人：ある目的のために、とある荒廃した世界に降り立った仮面ライダーがいた…その名は『仮面ライダーディバスター』、またの名を『世界の蹂躪者』…

―仮面ライダーの世界を旅する世界の破壊者・仮面ライダーディケイドこと門矢士。

―世界を巡る怪盗・仮面ライダーディエンドこと海東大樹。

―実は彼等二人の他に世界をある『目的』のために行き来する仮面ライダーがいた…。

―とある世界。

「着いたか、別世界…。」

―腰にファイルの様なものをぶら下げた一人の青年・罪賀慈さいが・イツミはとりあえず遠くに見える村へと行く。

―何かの災害にでも遭ったかのか、村は半壊した家屋や寂れた雰囲気きんぎが漂っており、そして何より…。

「人間も『死んでる』のか…。」

―そう、この村にいる者達、人間全てがまるで死んだ様な濁った眼をしていた。

「…おい、この村で何があった？」

―慈は親子らしき、中年の男よしむら・ケンサク：善村賢作、少女よしむら・シキ：善村四季に話し掛け、村の事情を尋ねた…最初は賢作が話すのを渋る素振りを見せた

が、それを見かねて四季が慈に話す。

「ある日：突然、『大ショッカー』を名乗る怪物達が次々やって来て、好き勝手に破壊の限りを尽くしては村の人々を労働力として連れさらったわ：私の妹も：あいつらに、うう：。」

（大ショッカーか、こんな辺境世界にまでいるのか？）

—世界征服を目論む秘密結社『ショッカー』を基盤とし、クライシス帝国やゲドン、その他大勢が手を組み、あらゆる世界の全ての悪の魔窟たる一大組織、それが『大ショッカー』。

—そこまで言っていると、四季は思い出したかのように、静かに涙を流しはじめた。

「もういいだろ！これ以上思い出させないでくれ！！」

—賢作は悲しむ四季を抱き締めながら慈を怒鳴る。

「なんで戦わない？何故大切に思う家族を助けない？」

「無理だ！大ショッカーに逆らう者は反逆罪に問われて、処刑される：それだけでも堪らないのに毎日奴等は村を襲い、好き勝手に暴れて人をさらう、生きてるだけで限界だ！！うう：！！」

—それだけ言っていると賢作は四季と共に泣き出す。

「なるほど、理解した：で？奴等の本拠地はどこだ？」

「「…！？」」

—慈の思わぬ一言に二人は絶句する。

「何を言ってるんだ！？意味が解らな…。」

「…この村から北東の方角にある廃ビル、そこが奴等のアジトよ…。」

「四季…お前!？」

—賢作が慈に警告しようとしたが、四季がアジトの居場所を教えた。

「そうか…。」

—それだけ言い残し、慈はバイク・マシンデイバイダーに乗り込んでそのままアジトへ行ってしまった。

「お前、なんで…。」

「もしかしたら…あの人なら…。」

—四季は見守るような視線を慈の後ろ姿に向ける…もしかしたら彼ならばこの世界を、自分の妹を救ってくれる、そう信じて…。

—大ショッカーアジト。

『オラッ！働け、働け！！！にんげん下等生物共ッ！！』

「ギャアッ!？」

『生きてられるだけありがたいと思いやがれ!』

「ぐあああッ!!」

ーそこではアジト拡大のための強制労働を強いられ、連行された村の人間達が怪人達にムチで叩かれていた。

『勝手に休んだら…解るよな?』

ー怪人の一人が指差す向こう側には、十字架に磔になった白骨死体がカカシの様にたくさん並べられていた。

『まあ例え死んでも補充かわりを足せばいいだけだがな、キヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!』

『そりゃそーだ!! ヒヤッハー!!』

ーゲラゲラと怪人達一同は、逆らうことが出来ぬ村人達を心底バカにし切った嘲笑を上げる。

「良い加減にして…人間は、私達はあなた達の奴隷なんかじゃない!!」

『ああん!?!』

ーその時、耐え切れずに一人の少女…四季の妹・善村巡璃よしむら・めぐりが声を張り上げる。

『ほほう? 一丁前に口答えなんて良い度胸してんじゃねえか!』

「きゃああああ!？」

一巡璃は怪人に押し倒され、地面に組み伏されてしまった。他の村人達は逆らえば処刑される、なので彼女を助けようとしなかった、全員目を背けていた。

『このアマ…なかなか良い身体してんじゃねえか、あぁん?』

「い、いや…キャアアアアア!！」

一怪人は巡璃の服を乱暴に引き千切る、服の下からは下着に包まれた発展途上の豊かな膨らみが見える。

『…さてと、ヒヒヒヒヒッ!！」』

『おい、終わったら次オレな!』

『次はオレ、オレ!!』

(悔しい…こんな奴らに…)

一巡璃はこれから怪人達にされることを考えただけで顔が青ざめていき、顔から一筋の涙を零した。

『キヒヤヒヤヒヤ!！」』

一無慈悲にも、怪人が巡璃のスカートを下着ごと手にかけて…。

「やれやれ…大ショッকারの品位も落ちたもんだな、ゲス共の集まりが。」

『『『!?!?』』』』

「…え？」

—いつの間にか、そこにはバイク：マシンデイバイダーに乗った一人の青年・罪賀慈が立っていた。

『だ、誰だテメエは!!どっから入って来た!?!?』

「地獄から…って、言ったらどうする？」

『ふざけんな!!!』

—某地獄を見てきた兄弟の様なことを言う慈の態度にキレたオルフェノク、ファンガイア、改造人間といった怪人達が一斉に集まり、慈を取り囲む。

『生きて帰れると思うなよ!!! 下等生物!!!』

—慈を囲むジラフォルフェノク・マンティスオルフェノク・シープファンガイア・シースターファンガイア・ザンジオー・シオマネキングがいつでも彼を殺せるよう身構える。

「まあいいや…とりあえず…」

—そう言うとき慈は腰にデイクイドライバーに似たベルト…しかし全体的に淡い紫がかった色のベルトを装着しながら、ファイル型のアイテム『ライドファイランクス』から一枚のカードを取り出す。

「変身。」

「KAMEN—RIDE：DIBUSTAR！」

一電子音と同時に慈は複数のカードのビジョンに包まれた瞬間、灰色の鎧やスーツを身に纏う。

一頭・肩・腕に満遍なくライドプレートと呼ばれるカード状のものが突き刺さり、スーツや鎧の灰色が暗い紫と黒に変わる。

一最後に四つの眼が金色に妖しく輝くと、全ての変身プロセスが完了了。

『なんだコイツは…まさか、噂のディケイド…いや、ディエンドか！？』

一ディケイドの存在は大ショッカーにも伝わっており、怪人達は変身した慈に警戒の意志を見せる…。

『どちらもハズレだな…オレの名はディバスター、別に覚えなくてもいいぜ？何故なら…。』

一ディバスターはライドファイランクスⅡファイルモードからカードを一枚取り出し、ディバスターライバーに装填する。

『お前らは今ここで全員死ぬんだからな…。』

「ATTACK—RIDE：FLAME！」

『ギ…ギアアアアアア！？』

『『『!!!』』』』

ーディバスターはライドファイランクスをファイルモードからガンモードに変更し、眼前にいたジラフォルフェノクの顔面目掛けてアタックライド『ディバスターフレイム』を発動…銃口から吹き出る灼熱の炎で焼き殺した。

『汚物は消毒だ…ってね』

『貴様ッ!!』

『殺す!!』

ーシースターファンガイアとシオマネキング、二人同時にディバスターに立ち向かう。

『カニは食えてもヒトデは食えないな…。』

『ATTACK—RIDE…PANISH!』

『ギイツ!?!』

『が…!!』

ーディバスターはライドファイランクスを素早くランスモードにし、素早い突きで二体の怪人の首を『ディバスターパニッシュ』で素早く、正確に刺し貫く。

『クソ…死ねええええ!』

一残りの怪人全員がディバスターに飛び掛かったが、ディバスターは素早く次のカードを装填した。

「ATTACK—RIDE：CELBEROS！」

『バラバラになりな…消し飛ベッ！』

『『ぐぎえええええッ！？』』

一本来ならば仮面ライダーG3—Xの武装であるはずのガトリング式機銃『GX—05Ⅱケルベロス』を出して一斉掃射で敵怪人をハチの巣にした。

『…これで全部か…。』

一ディバスターがそう呟くと…。

『貴様…よくも私達の部下を殺したな…何者だ？』

『…？』

一ふと背後から何者かの声が聞こえたのでディバスターが振り返った直後…。

『シェリアッ！！』

『ギェアッ！！』

『！！』

ーディバスターは振り向き様に何者かに殴り飛ばされる。

『ディケイドだかディバスターだかなんだか知らぬが…。』

『我等兄弟の管理する世界で勝手な真似は許せんなあ？』

『…。』

ーディバスターは無言で起き上がりながら『ソイツら』を見つめる。

ー金やブラウンのステンドグラスに彩られた身体に牙の様な装飾を頭や肩に、尻尾に似た装飾を後頭部に生やし…セイウチに似たビーストクラスに属するウォーラスファンガイア。

ーウォーラスファンガイアによく似た見た目だが、牙の装飾が短く、身体の色がコバルトブルーと銀色のアザラシに似たシールファンガイアの二体がディバスターを見下ろしていた。

ーこのファンガイア兄弟はこの世界の管理を任されてる、いわば指揮官的存在の怪人であった…が。

『フン…ファンガイア雑魚が2匹増えただけか…。』

『なんだと…？』

『雑魚とは無礼な…！』

ー兄Ⅱウォーラスファンガイア、弟Ⅱシールファンガイアの兄弟はディバスターの言葉にキレたらしく、睨みつける。

『これはこれはとんだ御無礼を、お詫びに…もつと御無礼して差し上げましょうってな!』

—ディバスターは言うなりいきなりケルベロスによる射撃をウォーラスとシールに与えるが…。

『フンッ…だからどうした!!』

『この程度の玩具で我ら兄弟に傷をつけられるとでも…?』

『ほう? 中々にしぶといな!!』

—2体の防御力はかなり高く、装甲の様な身体には全く傷がつかなかった…しかしディバスターは驚くどころか、仮面の下で不敵に笑う。

『『死ねっ!!』』

『誰が死ぬか、バカ…。』

—ウォーラスとシールはファンガイアの牙『吸命牙』を出してディバスターのライフエナジーを吸い取ろうと振り降ろすが、ディバスターは身を翻して回避。

『うっとおしい攻撃しやがって…だったらその動き、「封じる」まで!!』

—ディバスターはカードを引く…そのカードに描かれていたものは、仮面ライダーキバ…と、キバのバックで蜘蛛の巣の様に張り巡らさ

れた無数の銀の『鎖』だった。

「ATTACK—RIDE∴CATENA！」

一次の瞬間…。

『ぐ…グアアアアアアッ！？なんだこれは！？』

『力が…力が抜けてく…ギャアアアッ！！』

—突然現われた無数の鎖∴『カテナ』で兄弟は全身をがんじがらめに拘束されてしまった。

『ハハハ！！バカ共め！当然だ！！何せソイツはキバの魔皇力は勿論、あらゆる魔の力を封じる鎖なんだからな！！』

—本来ならばキバの鎧に負担を与えぬ様に魔皇力を抑制する役割をするカテナはファンガイアなど魔術を使う者の魔力を強力な封印・拘束によって封じることが可能なのだ。

『さてと…トドメだ、サッサと死ね。』

—冷淡に言うディバスターはここで必殺技を^{ファイナルアタックライド}発動した。

「FINAL—ATTACK—RIDE∴DI・DI・DI・DI
BUSTER！」

『さて…何が来るかな…？オレの必殺技はかなり特殊でな、オレ自身何が起こるかサッパリ解らないんだよ…ククク…。』

一発動させたFAR『ディメンションパトリオット』、効果はあらゆる兵隊・武装・兵器をランダムで呼び出す…しかし、ディバスター自身すら何が起るか解らない…。

『もしかしたらこの世界が滅ぶ様な奴が出るかもな…。』

『なんだと!?!』

『ふ…ふざけるな!そんなものを平然と使うなんて…狂ってるのか!?!』

一ファンガイア兄弟に言われるもディバスターは笑ってるだけで何も言い返さない。

『来たぜ。』

一上空からオーロラが現われ、さらにそこから…。

『キシヤアアアアアアアア!!!』

『~~~~~!!!』

『ギャオオオオオオオン!!!』

『キバツて行くぜー!!』

『キイイイイイイイツ!!!』

『その命…神へと返しなさい!!!』

一絶叫を上げながら肉片すらも残さずに、兄弟は大ショックのマジトと残りの怪人や戦闘員達諸共、この世界から跡形も無く…消された。

『やれやれ…やり過ぎたか…?』

「あ…あああああ…。」

一巡璃が慈を…ディバスターを畏怖するには充分だった。

一確かに怪人達は忌むべき存在…しかしそれを突然フラリと現われ、異形に変身し…まるで虫をいたぶり殺すかの様に、尚且、過剰なまでの兵器と兵力で文字通り『皆殺し』にした彼…この後自分達をどうする気か…。

『おい…お前のその顔、村にいた女に似てるな…来い、村に帰してやる…。』

「え? 四季姉さんを知ってるの…?」

一巡璃はディバスターのこの一言で、ほんの少しだが警戒心を解いた。

『まあな、あとは今この場にいる連中に伝えてやれ…もう自由だってな。』

「は…はい…!」

一巡璃はこの言葉でようやく確信した…『この人は救世主なんだ』

と。

―巡璃は奴隷にされた者達にこのことを伝えに行った。

『フ……。』

―だがディバスターは戦いが終わったにも関わらず、変身を解かずに不敵に笑っていた…。

―さらわれた人々と共にディバスターは村に帰還した。

「おい見ろ！あいつら大シヨッカーにさらわれた連中じゃないか…？」

「ほ、本当だわ！！」

「おーい、みんなー！！」

「帰ったぞー！！」

―最初こそは村人達は帰ってきた者達を見て信じられない顔をしたが、本物と解ると一斉に駆け出して、泣きながら抱き合ったり、再開を喜んだりしていた。

「姉さん…父さん！！」

「巡璃ー！！」

―巡璃は四季と賢作の姿を確認すると、涙をポロポロ零しながら彼等の元に走る…。

（そろそろ頃合だ、な…!）

—デイバスターはマシンデイバスターから、駆け出す巡璃の背後に立ち…：どういうわけか、ARカードを取り出し、デイバーストライバーに装填…。

「ATTACK—RIDE…SCORPION!」

—仮面ライダーG3の武装のサブマシンガン・GM—01スコーピオンを取り出し…：それを巡璃に向かって…。

「え…?」

「め…巡…璃?」

—無慈悲なる銃弾^{なまり}を放ち、彼女を貫いた。

「姉…さ…」

—血を吐きながら巡璃は必死に手を伸ばすが、届く前にスコーピオンからの射撃は終わらず、息絶えるまで、銃弾が尽きるまで彼女の身体に撃ち込まれる。

「巡璃!巡璃イイイイイイ!」

「貴様アアアアア!何の真似だ!?」

—訳も分ならず娘を殺された賢作がデイバスターに掴み掛かるが…。

「ATTACK—RIDE∴SWORD—VENT!」

「がは…!?!」

「と、父さん!!」

—ディバスターは仮面ライダー王蛇の武器・ベノサーベルで刺し、ベノスネーカーの持つ毒素で賢作を惨たらしく苦しめる。

「な…なん…で…。」

『…バカかお前ら? オレはお前らを「助ける」なんて一言も言っていないぜ…?』

「グフ…。」

「父さああああんッ!!」

—ベノサーベルを引き抜くと、死んだ賢作を蹴り飛ばす。

「な…なんで!! なんで殺したの!?!」

—四季は父と妹を殺され…さらには裏切られた怒りと悲しみを全てディバスターにぶつけて、理由を問いたです…。

『なんで? ああ…話してなかったな、オレの目的はな…世界の「間引き」だ。』

「世界の間引き…?」

『そうだ：世界ってのはいくつもある：まあパラレルワールドって奴だな、だがな：パラレルワールドは今も無数に増え続けている、樹が枝別れするように：だが増え続けるのがいけないんだよ：。』

ーディバスターは大仰に手を広げ、結論を言った。

『このまま世界が増え続けたら他の世界がその影響で消える危険性があると発覚してな：オレはそのためにこの世界を間引き：要は消しに来たんだよ。』

「なん：ですって：。」

ー四季は絶句した：そんなことのために、自分の家族どころか世界まで消そうとするなんて：。

『解らなかったならもう一度言ってやる：この世界はいらないんだよ、あっても他の世界に迷惑なんだよ、そうそう：世界を消す方法ってのがな：。』

ーそしてディバスターは恐るべき世界の末梢法を告げた。

『その世界にいる人間全ての抹殺、だな：まあ大シヨッカーがいたのは予定外だったがな：オレがさらわれた連中を連れてきたのは単にバラバラの場所にいる奴等を一カ所に集めたかっただけだ。』

「ひ：ヒイイイイイ！」

「人殺しいいいいいいい！！」

ーディバスターの言葉を聞いた人々が悲鳴を上げながら一斉に逃げ

出すが…。

『逃げるなよ…せっかく集めたのに!!』

「FINAL—ATTACK—RIDE…DI・DI・DIBUS
TAR!」

—デイバスターは再びディメンションパトリオットを発動…オーロラから今度現われたものは…。

『全隊、構え!!』

『おばあちゃんが言っていた…天道を往け、とな。』

『いっくぜエー!!』

『これぞ、パーフェクトハーモニー完全調和だ。』

『風の向くまま、気の向くまま…一つのいわゆる…なんだろう?』

『オレは神に代わって剣を振るう男…!!』

『行くぞ相棒…。』

『うん、兄貴…。』

「う、うわああああ!! 助けてくれえええええッ!!」

—仮面ライダーザビー率いるシャドウ部隊のゼクトルーパー軍団。

一 仮面ライダーカブト・ガタック・ドレイク・サソード・キックホッパー・パンチホッパーといったマスクドライダーシステムを使うライダー達で構成された『カブトの世界』の精鋭たる兵団が現われ、パニックになった人々が逃げ惑う…。

『やれ…「カブトの世界」の最速の兵団よ!!』

『撃てーーーッ!!』

「ギャアアアア!!」

「あああああ!!」

「ママー!! パパー!!」

一無尽蔵に近い人数のゼクトルーパー達がザビーの指示に合わせ、マシンガンブレードによる射撃で、逃げる者は女子供・老人問わずに次々と射殺する。

「た…助け…!」

「CLOCK UP」

「グアアアア!!」

一 運良く射撃を逃れた者がいたとしても、カブト達のクロックアップですぐさま追いつかれ、殺される…。

一 カブトのライダーキックで蹴り殺され、ガタックのライダーカッティングで首を刎ねられ、ザビーのライダーステイングで刺され、

ドレイクのライダーシューティングで狙撃され、サソードのライダースラッシュで斬り刻まれ、キックホッパーとパンチホッパーの連携で次々と蹴殺・殴殺…。

一後に残ったものは鮮血によって赤い世界に彩られた村：村人達の無残な死体：銃痕や転がる空葉莢：煙や火の手…。

「あ…あああああ…あああああああああああああ…！」

一何故か一人：彼女・善村四季だけが生き延びた…否、生かされた。

『さてと…あとはお前一人だな？どうしてやろうか？』

ーデイバスターはライドファイランクスをガンモードにして銃口を四季に向ける。

「悪魔！アンタなんか人間じゃない！！殺してやる…殺してやる！殺してやる！殺してやる！お前だけは許さない！！殺してやる！！」

一憎悪のこもった罵倒を吐きながら四季は泣きながらデイバスターに向かう。

『…やめだ、お前は生かした方が楽しそうだ…それにお前一人くらい生かしてもどの道この世界は終わりだ…』

ーデイバスターはここで変身を解いて、四季の頭を乱暴に掴み、狂気の宿る眼で見つめて告げる。

「オレの名は罪賀慈…またの名を『世界の駆逐者』…いや、『世界の蹂躪者』デイバスターだ、家族の敵を取りたかったら、再びオレ

の前に現われな…そしてオレを存分に楽しませろ…ゲームは障害があった方が面白い、グロンギもそう言った事あるらしいな…ククククク！！」

—慈は邪笑を浮かべてオーロラの彼方へと消えていった…。

「巡璃…父さん…う…うう…うあああああああああああああああああああああ！！」

—あんな奴を…罪賀慈を信じたばかりに…かけがえない家族を失った少女・四季の慟哭が蹂躪され尽くした無人の村に虚しくこだまする…。

「罪賀…慈…ディバスター…絶対…殺してやる…あああああああああああああああああああああ！！」

—憎しみと怒りと悲しみで固く心に誓った復讐者・善村四季。

—『四季の世界』だけで飽きたらず、別の世界を再び間引きという名の虐殺を行いにいった狂気の蹂躪者・仮面ライダーディバスターこと罪賀慈。

—この二人の衝撃の出会いが後に、やがて世界規模での壮絶な戦いにまで発展していった…それはまた別の話である。

（後書き）

どうも、作者の柳雨といいます

後書きにて語らせていただきますが、本作の主役・仮面ライダーデ
イバスター& amp; 罪賀慈はズバリ『悪』のライダーです、それ
以外に当てはまるカテゴリーが全くありません…（謝）

悪のライダーを主役にしたライダー小説を一度書いてみたかったの
が本作を書いた動機であります

そして本作のコンセプトは『裏切り』です…あらゆる展開、あらゆる
キャラ、その他諸共…全ての全てをこれでもかというくらい裏切
りまくる外道な行為を終盤にさせました

必殺技…はい、もう必殺技でもなんでもないオーバーキル、単なる
リンチですね…しまいには人間相手にライダーに必殺技使わせたり
（酷）

慈と四季…狂気と憎悪の果てに二人はどうなってしまうのか…キャ
ラがキャラなので、ストーリーも問題作過ぎて連載は難しいです（
汗）

それではまたどこかでお会いしましょう、本作を最後まで読んで下
さった皆様、どうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6761k/>

世界の蹂躪者-仮面ライダーディバスター-

2010年10月22日00時41分発行